

令和 2 年 9 月 20 日現在

機関番号：34305

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K03244

研究課題名(和文)日本人ムスリムの若者たち：トランスナショナルな生活実践とアイデンティティ形成

研究課題名(英文) Building Transnational Lives and (Re)creating Identities: A Case of Japanese Muslim Youth

研究代表者

工藤 正子 (Kudo, Masako)

京都女子大学・現代社会学部・教授

研究者番号：80447458

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文)：日本人の母とパキスタン人の父をもつ10代から20代のムスリムの若者に対する聞き取りの結果から、トランスナショナルな家族形成、教育、社会的包摂と排除、等をめぐる経験や認識等が明らかとなった。成人期を迎えた若者たちは「日本人 外国人」「ムスリム 非ムスリム」の二元的枠組に回収されない多様なアイデンティティやライフスタイルを創造しており、そこにジェンダーや宗教、移動の経験などが複雑に交差している。日本社会の多文化化が深化するなかで、国民国家の均質性を自明視する枠組を脱却し、複数のルーツをもつ若者たちの移動の経験やアイデンティティ形成の多様性を視野にいれた新たなモデルを構築する必要がある。

研究成果の学術的意義や社会的意義

近年、日本では複数のルーツをもつ子どもの教育や生活に社会的関心が向けられるようになった。これら子どもたちの生きる環境は多様であり、国籍やジェンダーなどの複数の差異が交差している。本研究はイスラーム的背景をもつ日本の若者に焦点を当て、彼ら彼女らが社会でどのような位置におかれ、いかなる生き方を切り拓きつつあるのかを理解しようとする。日本のムスリム人口は1980年代以降急増したものの、観光客や出稼ぎなどの一時的滞在者として捉えられることが多かった。これまで見えにくかった日本人ムスリムの若者の経験をとおり、日本の多文化共生社会を構築するための新たな糸口を提供することに本研究の意義がある。

研究成果の概要(英文)：Drawing on in-depth interviews with Muslim youths born to Japanese mothers and Pakistani fathers, this study illuminates their experiences and perceptions regarding (1) transnational families, (2) education, (3) social inclusion and exclusion, and other aspects of their lives. Research participants ranged between late teens and twenties. The study reveals that gender, religion, migration experiences, and other factors interact and affect the trajectories of identities and lifestyles, which cannot be understood in terms of dichotomous frameworks such as “Japanese versus foreign” or “Muslim versus non-Muslim.” The findings call for a model of multicultural society that eschews ideas of nation-state homogeneity, and instead constructs a new framework that brings into perspective the diversity of migration experiences and identities among new generations of Japanese Muslims with multiple roots.

研究分野：文化人類学

キーワード：イスラーム 若者 トランスナショナルな家族 ジェンダー アイデンティティ 日本 移動 排除と包摂

## 様式 C-19、F-19-1、Z-19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

日本では**1980**年代以降、ニューカマーと呼ばれる外国人が増加し、好況下で深刻化した労働力不足を補った。パキスタンやバングラデシュなどからのイスラムの単身男性も多く来日し、**1990**年代にはこれらイスラム男性の間で、日本人との結婚を通して日本社会に定着する者が増加した。日本人女性と結婚したパキスタン人男性の多くは結婚後に起業（主に中古車輸出業）している。日本人女性配偶者たちは結婚を機にイスラームに入信し、子どもたちも生まれながらのイスラムである。日本の国籍法改正（**1985**年施行）で両系血統主義に移行したことで、これら夫婦の子どもは、出生時より日本国籍を付与されるようになった。子どもたちの多くは、本研究の開始時点では**10**代後半から**20**代であった。これらの国際結婚夫婦は日本国内に生活基盤をもちつつ、親族訪問やビジネスや海外の親族とのネット上でのやりとりなどをおしてトランスナショナルな生活空間を築いているケースが多い。また、後述するように、**2000**年代初め頃に子どもが就学期を迎えると、子を海外で育てるために母と子が移動するパターンも出現した。調査の開始時点では、これらの家庭にはビジネスが好調なケースがみられる一方で、経済的に困難な状況にあるケースも少なくなかった。こうしたなかで、子どもたちは大学進学や就業の時期を迎え、日本国内で育った子どもたちが他の都市や海外に出たり、海外で育った子どもたちが日本や別の国へ移動するケースが増え始めるなど、家族形態の再編の段階を迎えていた。

### 2. 研究の目的

本研究は、日本人の母とパキスタン人の父をもつ若者たちを対象とした聞き取り調査の結果から、①親のトランスナショナルな生活戦略が次世代の教育や就業にどのような影響を与え、②イスラムとしての宗教的意識や実践、帰属の感覚がいかに形成されているのかを明らかにする。これまで見えにくかった日本人イスラムの若者たちの移動や家族、教育に関わる経験を照射することをつうじて、日本の多文化化プロセスに宗教やジェンダー、国籍がいかに交差し、それがどのような自己像の形成につながっているのかを考察する。

### 3. 研究の方法

(1) 国内外に居住する男女**35**名に半構造的な聞き取り調査を行った。本研究に参加した若者の年齢層は(**30**代前半であった**2**名を除き)**10**代後半～**20**代後半で、女性が**23**名、男性が**12**名であった。聞き取り時点の生活拠点は、日本、パキスタン、アラブ首長国連邦、ニュージーランドなどであった。

(2) 補足的に、対象者らとその母親たちが参加する私的な集まりに参加したり、家族を訪問した際に、母親やそのほかの家族（父方拡大家族を含む）にも話を聞いた。

(3) 文献調査および、国内外での研究発表等をおして関連分野の研究者との意見交換を行った。

### 4. 研究成果

#### (1) トランスナショナルな家族の形成

**35**名の若者は、**24**家庭の子どもたちである。その多くは成長過程で国境間移動を経験している。家族形態は多様かつライフサイクルの進行とともに変化しているため類型化は不可能であるが、子どもたちが高校を卒業するまでの**24**家庭の移動の軌跡は下記のように大きく分類することができる。

- ① 家族全員が日本を拠点に生活：8家庭。
- ② 子の就学期以降、母と子がパキスタンの父親の拡大家族へ移住（父親は日本を拠点にビジネスを継続し、妻子や拡大家族に仕送り）：6家庭。
- ③ 子の就学期以降、母と子が第三国（アラブ首長国連邦など）に移住：3家庭。
- ④ 母と子で海外に移住後、別の国に再移動し、複数国での居住を経験：3家庭。
- ⑤ 子どもだけで海外（パキスタンなど）に留学：4家庭。

上記①の若者の多くは、日本を生活拠点としつつも、パキスタンからの親族訪問／長期滞日や親のビジネス、イスラムやパキスタン人の宗教的、私的な集いへの参加などを介して、トランスナショナルな人のネットワークのなかで成長している。

上記②～⑤は、子どもが就学期を迎えた**2000**年代以降にみられてきたパターンである。母親への聞き取りによれば、国境を越えた家族形成の動機は複合的かつ個別多様であるが、多くのケースで、親、とくに父親が子をイスラーム的な環境で育てたいと願い、とくに、娘を性的に保護したいと強く願うケースがみられた。そこには、娘の男女隔離（パルダ）の実践が親族集団の名誉の維持に肝要な位置を占めるという宗教文化的なジェンダー規範が関わっている。第二に、日本人の母子がパキスタンに移動する場合には、父が日本から仕送りをし、二国間の経済格差を利用することで拡大家族全体の生活レベルが向上したり、子どもにパキスタンで英語教育を受けさせることができるなどの利点が挙げられる。海外に移動した例では、夏季休暇中に日本に戻るなどして国境間を移動しながら成長しており、その頻度や滞在期間等によって日本やパキスタンの親族との間に多様な関係を形成していた。こ

うした成長期の移動は、親が決めた他律的移動だけでなく、子どもの希望で移動した例もある。さらに、対象家庭には、離婚等のケースも含まれており、成長期の移動の経験や記憶にくわえて、こうした家族状況に関わる変化も、アイデンティティや帰属感の形成プロセスに複雑に作用している。

## (2) 青年期の国境間移動：大学進学

上記(1)のパターン②～⑤のうち、海外で高校を卒業した18名中、その半数(9名)が、大学進学のため、それまでの居住国以外の国(日本を含む)に再移動している。どの国の大学に進学するかは、親の経済状況や社会関係資本(宗教や親族の超国境的ネットワーク)、教育のグローバル化だけでなく、ジェンダー規範や、欧米の先進諸国におけるイスラーム嫌悪への懸念などが複合的に作用している。性の二重規範は子どもの大学進学でもみられ、息子の進学に対しては親からの規制がとくにみられないのに対して、娘に対しては、前述した宗教文化的なジェンダー規範のため、一人で海外に出ることを父親がよしとしなかったケースが複数みられた。ただし、娘が単独で親族のいない国に留学したケースもあり、娘の性的保護に関わる態度は父親の間でも一様ではなく、また時間の経過のなかで変化するケースもある。

進学に関わる選択には家族状況も関わっていることが多い。例えば、国境を隔てて分散してきた家族が再び共に暮らすために、海外から日本の大学に進学することを選んだというケースもみられた。そこには、国境間に家族が分散することに対する複雑な感情が関与しており、移動の動機が経済的地位の向上や教育目的だけに還元できない多面的なものであることを示唆している。

## (3) トランスナショナルな親密圏の関係形成

居住国や国境間移動の経験にかかわらず、若者たちの成長期には、親族間に、国境を越えた親族間の行き来や、贈り物や送金、感情、行為(育児や介護に関わるケアやビジネスへの参画など)、または、通信技術の進歩を利用したメッセージ等のやり取りがみられ、それによって国境を越えた親族のネットワークが維持、活性化されている。一方で、**Cole and Groes (2016)**が示したように、親や子ども世代が親族ネットワークに対して意図的に距離をおくケースもある。さらに、家族や親族間での力関係や葛藤により、国境を越えた親族ネットワークが縮小したり、再形成される場合もある。親族ネットワークでの位置や距離のとり方は、ジェンダーや世代、使用言語などによっても異なる。

## (4) 言語

言語は本研究に参加した若者たちのアイデンティティ形成や生活戦略に重要な位置を占める。主に日本で成長したケースでは、家庭内言語は日本語であることが多いが、学校や職場で、国際結婚の親をもつ「ハーフ」であるために「多言語ができて当たり前」というステレオタイプを押しつけられ、子どもたちにとって理不尽なプレッシャーとなっているケースが少なくない。

海外に居住するケースでは、家庭内の言語状況は多様であり、海外へ移動した年齢や、日本への帰国の頻度や滞在期間、学校の種類(授業が英語で行われているか否かや、学校の生徒のエスニックな構成)などの諸要因が関与している。海外で育つ若者は、いっそう多言語的な空間に生きているが、そうした若者たちは、移動によって新たな言語を自然に習得したというよりも、その獲得のために努力(または苦労)をした経験が語られるケースが多かった。そのことは、移動の当事者である子どもたちにとって、国境間移動が、地理的移動のみならず、言語や教育システムを含む複数レベルでの移動であることを示している(**川上 2013; Fresnoza-Flot and Nagasaka 2015**)。海外で育った後に日本に移動した場合には、多言語の資源が進学や就職に活かされる一方で、日本語の読み書き能力の課題が、制度的、非制度的な排除につながるケースも少なくない。そうした言語に関わる排除の経験もアイデンティティや帰属感の形成に作用している。

さらに、成長後に、日本語または父方親族の使用言語を獲得しようとする例が、居住国や家族環境(親が離婚したケースを含む)にかかわらず、複数みられた。ここにも、言語がアイデンティティや関係性の形成に果たす重要性が示されている。

## (5) 社会的な包摂と排除

日本で育った場合には、学校で排除された経験をもつケースが少なくない。名前や、外見、「ハーフ」であることや、給食でハラームな(イスラームで禁じられた)食品を避けるという宗教実践等が排除へと結びついている。さらに、女性の場合には、体を覆うという宗教文化的なジェンダー規範から、制服のスカートではなくズボンで登校したために排除や疎外を経験したケースがみられた。そこには父親からの期待だけでなく、日本の学校における同調圧力が深く関わっている。

海外で育った場合には、「ハーフ」という日本人的概念による差別ははるかに少ないが、それは排除が皆無であることを意味しない。排除や包摂の経験は、当事者の居住国や地域における他者化や排除のコンテクストや、国家間の序列における日本の地位、年齢による環境の

変化などが複雑に関わっている。さらに、海外居住者が成長過程で日本に一時帰国や再移住したり、日本居住者がパキスタンの親族を訪問した際に、あからさまな、または、見えにくい排除や他者化の経験をとおして、「自分はどこにも属していない」という多重に周縁的な感覚をもつようになったケースが複数あった。

以上のように、本研究に参加した若者の多くは、日本内外で多様な排除や他者化を経験している。日本国籍をもちながらも日本社会で排除される経験は、自明とされがちな国籍とアイデンティティの関係を批判的に問う契機となっている。子どものときは学校での排除の経験を親に話さず一人で悩んだケースが多いが、青年期を迎えた段階で、排除の経験や記憶を再解釈し、新たな自己の形成に向かうケースが多くみられた。また、高校卒業後は、社会関係の中心が大学や職場に移行することから、排除と包摂をめぐる状況が変化しており、そうした環境の変化も若者たちの自己の形成に作用している。

#### (6) アイデンティティと帰属感：宗教とジェンダー

上述のように、青年期に移行した段階で、社会における自己の位置どりを捉え直して、新たな居場所や生き方を獲得しようとしているケースが多くみられた。本項では、紙幅の制限からその多様性や動態を事例を挙げて詳細に報告することはできないが、そのプロセスにイスラームやジェンダー等が複雑に交差している点を指摘しておきたい。

##### ① イスラーム：宗教的な自己の（再）形成

対象者の宗教実践は、家庭や居住国の環境などによって多様かつ可変的である。日本で育った場合には、子ども時代には、イスラームを親からの「押し付け」と感じるケースも複数みられた。日本ではムスリム・コミュニティの規模が小さいことから、学校ではムスリムは自分とキョウダイだけというケースが多く、そうした状況で、家庭外では同化の圧力を強く感じて成長するケースが多い。

海外で育つケースでは、ムスリムがマジョリティである国や、そうでなくとも、規模の大きいムスリム・コミュニティで生活するケースが多い。そうしたケースでは、周囲にムスリムが多いだけでなく、イスラームを学ぶための資源（イスラームが学校の教科としてあるなど）が多い点でも日本と異なる。日本で育つ場合には、親を含めて少数のムスリムしか知らないために、ムスリムとしてのロールモデルをみつけることが難しいと感じる傾向が強い。

こうしてイスラームをめぐる環境は、家庭状況等のほか、育った国や地域で大きな違いがあり、成長後のイスラームの捉え直し方という点でも差異がみられる。日本では、マイノリティ・ムスリムとして経験した困難やその記憶が、ムスリムとしての自己の位置づけに影響していることが多い。一例として、非ムスリムとムスリムの世界のどちらも知っているがゆえに、イスラームを反省的に捉え直し、親世代とは異なる新たなムスリムとしての生き方を構築していこうとする立場が挙げられる。しかし、ムスリムがマジョリティである国や地域で育った場合も、必ずしもイスラームを所与のものとして捉えているわけではなく、成長過程のある段階で周囲の宗教実践との間に距離をとり、アイデンティティを再形成していくケースがみられた。さらに、青年期に教育や就業を契機に国境間を移動することがムスリムとしての自己の再形成につながるケースもある。このように、宗教的意識や実践の変化の軌跡は多様であるが、下記の女性たちの自己形成の過程にみられるように、「本来のイスラーム」と「文化」を切り離したうえで、前者を価値づけ、それを参照点として自己を形成していこうとするなどの志向性がみられた。

##### ② ジェンダー

本研究に参加した女性たちの多くが成長過程において、宗教文化的なジェンダー理念にそったムスリム女性としての行動や装いを、親（とくに父親）から期待され、それによって教育や就業の選択や、友人との関係形成の自由が制限されたと感じていた。男兄弟と比べて自由が大きく制限されていると感じていた女性は少なくなく、性の二重規範を感じながら成長している。日本で育ったケースでは、家の中と外（とくに学校）の価値規範が異なるゆえに、二つの世界を生きなければならないことが大きな課題であったと語った女性が複数いた。日本に居住する場合、こうした家庭での困難を理解しようとしてくれた学校の非ムスリムの友人や、自分と同じように日本人の母とパキスタン人の父をもつ女性の友人と緊密な関係を形成したケースもある。

女性たちの多くは、居住国が日本か海外かにかかわらず、父親が自分の行動や着るものを規制しようとする点について、イスラームの教えというより、娘の行動を男性の名誉と結びつける「パキスタン（または在外パキスタン人社会）の文化」によるものと理解していた。イスラームの捉え方は成長の過程で変化し、例えば、「パキスタンの文化」ではなく、「本来のイスラーム」を重視し、後者を自分の指針として構築しようとする傾向が一部でみられた。

（その一方で、パキスタンに関わる記憶やモノ（衣や食など）を肯定的に捉え、自己のアイデンティティやライフスタイルに積極的に取り入れるケースは少なくない）。宗教については、イスラームの価値規範のなかで良いと思う部分を自己のライフスタイルに取り入れていく、という選択的な方法をとる女性たちもいた。このように自己を再構築するために動員する資源は、国境間移動の経験や、インターネット上の情報にアクセスするための言語資源、

社会的ネットワーク、等の複合的な要因が関わり合っている。

上述のように、進学や就業の段階に入った女性たちにとって、父親が娘に期待するムスリム女性としての理想像と娘自身のそれは必ずしも一致しない。女性たちの多くにとって現在の大きな課題は、父親が娘にムスリムとの結婚を期待するなかで、自分なりの結婚のかたちを模索することである。その過程は多様であるが、結婚をめぐる女性たちの語りからは、個別の状況のなかで、父親の期待に折り合いをつけながら、新たな関係性を切り拓いていこうとする絶え間ない交渉の過程が明らかとなった。親が離婚したケースにおいても、自己の再構築や結婚をめぐる複雑な変化の過程がみられた。また、娘の結婚に関わる父親の理想は必ずしも一枚岩的ではなく、かつ、年齢とともに変化する場合もみられる。

#### 総括

以上の結果は、次の4点にまとめることができる。(1)若者たちが成長する過程で、その日常世界には、国境を越えたモノ、情報、送金、イメージ、行為、感情などのやり取りの回路（または、その遮断や再接続）が埋め込まれ、彼ら彼女らの自己形成のプロセスと密接に関わっている。(2)若者たちが日本内外で経験する社会的排除や差別、同化圧力、または家庭外の学校や地域での友人との関係形成も、若者たちの自己像や社会のイメージに様々な影響を与えている。(3)若者たちの自己の形成過程には、家庭の内外でのジェンダー規範や力関係、家族状況、移動の経験、階層なども複雑に交差している。(4)さらに、青年期を迎える段階になると、若者たちの間に、複数のルーツや移動の経験や記憶を再解釈し、多様なやり方で自らの居場所を築いていこうとする営為がみられる。こうして複雑な要素から形成される若者たちの生活実践や価値規範を「日本人ムスリム」として概念的に一括りにすることはできない。

これら若者たちの間にみられる多様性と動態は、多文化共生社会のモデルを模索するうえで、国民国家の均質性を前提とする「日本人－外国人」という単純な二元的枠組みを脱却し、差異や動態を前提とする新たな共同性のモデルを構築する必要性を示唆している。

#### <引用文献>

川上郁雄 2013 「“移動する子ども”学へ向けた視座：移民の子どもはどのように語られてきたか」、川上郁雄（編）『“移動する子ども”という記憶と力：ことばとアイデンティティ』くろしお出版. 1-42 頁.

Cole, Jennifer and Christian Groes. 2016. “Introduction: Affective Circuits and Social Regeneration in African Migration,” In *Affective Circuits: African Migrations to Europe and the Pursuit of Social Regeneration*, ed. Jennifer Cole and Christian Groes, 1-26. Chicago: The University of Chicago Press.

Fresnoza-Flot, Asuncion and Itaru Nagasaka. 2015. “Conceptualizing Childhoods in Transnational Families: The ‘Mobile Childhoods’ Lens,” In *Mobile Childhoods in Filipino Transnational Families: Migrant Children with Similar Roots in Different Routes*, ed. Itaru Nagasaka and Asuncion Fresnoza-Flot, 23-41. Basingstoke: Palgrave Macmillan.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 Masako Kudo	4. 巻 49(1)
2. 論文標題 The Evolution of Transnational Families: Bi-national Marriages between Japanese Women and Pakistani Men	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 Critical Asian Studies	6. 最初と最後の頁 18-37
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1080/14672715.2016.1264189	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計14件（うち招待講演 6件 / うち国際学会 6件）

1. 発表者名 KUDO, Masako
2. 発表標題 Growing up with Mixed Roots: Children of Japanese Mothers and Pakistani Fathers
3. 学会等名 MINDAS International Seminar, "Beyond the Borders: International Marriages between South Asians and Japanese, and the 'Mixed Generation' "（於・国立民族学博物館）（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 工藤正子
2. 発表標題 トランスナショナルな生活世界と混淆的なアイデンティティの形成：日本人の母親とパキスタン人の父親をもつ若者たちの事例から
3. 学会等名 日本文化人類学会 第52回研究大会（於・弘前大学）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 工藤正子
2. 発表標題 日本人ムスリムの若者たち：トランスナショナルな生活世界とことば
3. 学会等名 ひと・ことばフォーラム（第25回）「モビリティーズ 移動する人々のリアリティを熟視する」（東洋大学 白山キャンパス）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 工藤正子
2. 発表標題 南アジア系ディアスポラにおける文化変容：日本人の母とパキスタン人の父をもつ若者たちのアイデンティティ交渉
3. 学会等名 NIHUプロジェクト「南アジア地域研究」主催 2018年度南アジアセミナー：南アジア地域研究のフロンティア 「流動する人、モノ、文化を捉える」（国立民族学博物館）（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 工藤正子
2. 発表標題 トランスナショナルな生活世界と帰属の感覚：アラブ首長国連邦に暮らす日本人ムスリムの若者たち
3. 学会等名 移民とシティズンシップ研究会2018年度第二回研究会 Research Project on Asian Gulf Migrants and Citizenship (AGM2)（甲南大学）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 KUDO, Masako
2. 発表標題 Intimacy, Power, and Emotions in Evolving Transnational Families: The Case of Japanese-Pakistani Couples and Their Children
3. 学会等名 'Intimacy, Sexuality and Family in the Process of Migration: European / Asian Experiences Compared,' Universite Libre de Bruxelles, Belgium (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 KUDO, Masako
2. 発表標題 Negotiating Citizenship in Transnational Spaces: Young Japanese Muslim Women Born to Japanese Mothers and Pakistani Fathers
3. 学会等名 'Marriage Migration, Family and Citizenship in Asia,' Asia Research Institute, National University of Singapore (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Masako Kudo
2. 発表標題 The Emergence of Associational Ties among Young Japanese Muslims : The Children of Japanese-Pakistani Bi-national Marriages
3. 学会等名 国際人類学会 (CASCA/ IUAES2017 Conference in Ottawa) (主催: International Union of Anthropological and Ethnological Sciences (IUAES) and Canadian Anthropology Society (CASCA) (国際学会))
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 工藤正子
2. 発表標題 越境するムスリムの若者たち: 日本人女性とパキスタン人男性の国際結婚の二世世代の事例から
3. 学会等名 日本文化人類学会 第51回研究大会 (於・神戸大学)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 工藤正子
2. 発表標題 「ハーフ」の若者たちの自己像: 日本とパキスタンの国際結婚の子どもたち
3. 学会等名 人文研アカデミー2017、「人種神話を解体する 「血」の政治学を越えて」出版記念連続セミナー (主催: 京都大学人文科学研究所、科学研究費基盤研究(S)「人種のプロセスとメカニズムに関する複合的研究」) (招待講演)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Masako Kudo
2. 発表標題 Negotiating Belonging in One's Own Home: Japanese Muslim Youth Born to Japanese Mothers and Pakistani Fathers
3. 学会等名 Children of Migration in Asia: Child Migrants, Border-crossing Children, Border-blurred Children (於・立教大学) (国際学会)
4. 発表年 2017年



1. 発表者名 Masako Kudo
2. 発表標題 Negotiating Identities, Constructing Cultural Forms: A Case of Muslim Youth Born to Japanese Mothers and Pakistani Fathers
3. 学会等名 The 1st Asian Consortium for South Asian Studies “South Asian Diaspora and Popular Cultures in Asia” (於・Chulalongkorn University, Bangkok) (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 工藤正子
2. 発表標題 トランスナショナルな生活世界における自己像の形成 国際結婚の親をもつ日本人ムスリムの事例から
3. 学会等名 京都人類学研究会1月例会 (於・京都大学) (招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Masako Kudo
2. 発表標題 Growing up in Transnational Spaces: The Children of Japanese-Pakistani Marriages
3. 学会等名 The Contemporary Japan Study Group of WIAPS
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 Duncan Ryuken Williams, Masako Kudo, Stephen Murphy-Shigematsu, Jane H. Yamashiro, Frederic Rouston, Tim Greer, Akemi Johnson, Annmaria Shimabuku, Mitzi Uehara Carter, Laura Kina, Zelideth Maria Rivas, LeiLani Nishime, Sayuri Arai, Velina Hasu Houston, Kent Ono, Tamaki Watarai, Paul Christensen, Kevin Fellezs	4. 発行年 2017年
2. 出版社 USC Shinso Ito Center for Japanese Religions and Culture / Kaya Press	5. 総ページ数 444(73-86)
3. 書名 Hapa Japan: Identities & Representations	

1. 著者名 河合優子、工藤正子、川端浩平、渡会環、田中東子、高美智	4. 発行年 2016年
2. 出版社 ナカニシヤ出版	5. 総ページ数 225(28-53)
3. 書名 『交錯する多文化社会：異文化コミュニケーションを捉え直す』	

1. 著者名 竹沢泰子、川島浩平、岡村兵衛、高美智、成田龍一、菅野優香、水谷智、ダンカン・ウィリアムズ、李洪章、工藤正子、ミツィ・ウエハラ・カーター	4. 発行年 2016年
2. 出版社 東京大学出版会	5. 総ページ数 359 ( 303-331 )
3. 書名 『人種神話を解体する（第三巻）：「血」の政治学を越えて』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----